# 『さらば、山内君』　告別式・弔辞

東京外国語大学　渡辺　雅司

山内君の訃報に接し、愕然としています。君のいたずらっぽい大きな、澄んだ瞳はいまも目に浮かびます。

君が住んでいた西岡の樋口荘は僕の校宅のすぐ近く。春になるとオオチシギという異様な鳴き声と、すさまじい羽音を響かせる鳥が高い空から急降下してきます。それにしきりに感動したのは、内地から来た君と僕でした。そんな声を聞きながら、ソフトボールをしましたね。あまり年も離れていなかったので、君の事を弟のように見ていました。たしか教えたことはないんだよね。深水先生のコンパであったり、しんしんと雪が降る中、サッポロ・ジャイアンツのあの巨大な瓶を転がして、深夜の校宅を粕谷君と訪ねてくれましたね。僕もうれしくなって、それじゃ樋口の連中を起こそうということになって、みんなそろって西岡水源池に行き、真夜中、新雪の中を、転げ回りましたね。あのときの解放感は人生でそうないものでした。

昨年お見舞いに行ったとき、そのときのことを話したら、君はしっかりうなずいてくれたね。いっぺんに心が通じたと確信できました。不慮の事故とはいえ、あまりにも早い死、君とは話したいことがもっともっとあったような気がします。でも人生には限りはあります。短くはあったけれど、あんな素敵な、君には出来過ぎた奥さんを持ち、仕事も順調に行っていたのだから、幸せだったというべきなのだろう。それに札幌大学の黄金時代に居合わせたから、こんな人生を送れたのだと思う。たくさんの熱い心を持った友人たちに見送られる君は果報者だと僕は言いたい。

そして最後に、札幌大学ロシア語学科万歳！とみんなで叫びたい。君が生きていたら、真っ先にあの甲高い声で叫んでいることだろう。

どうか安らかにお眠りください。　合掌

二〇〇九年　三月　三〇日

一列目のネクタイ背広姿は向かって左から貝沼一郎、菱沼圭介、千葉萌一郎の諸先生。一列目右端が渡辺雅司先生（札大→同志社大→東京外大と赴任）。三列目中央の白っぽいコート姿が「さらば、山内君」を捧げられた山内和雄氏。